＜論文＞

定時制高校における生徒像の変容と生徒指導方針

大谷直史・柿内真紀

Transformation of student image and student guidance lines in part-time high schools

OOTANI Tadasi, KAKIUCHI Maki

キーワード：定時制高校，周辺化，生徒指導
Keywords: Part-time High Schools, Marginalization, Student Guidance

1．課題

筆者ら[i]はこれまで，現代日本社会において周辺化のあり様が多様化していることを指摘し，その多様に周辺化した層を定時制高校が受け入れてきたことを示してきた[ii]。とりわけ地方都市における昼夜間多部制定時制高校に，多様に周辺化された層が存在していることを明らかにし，混在する生徒を前に教員が指導に困難を抱えがちであることを指摘してきた。

ただし地方都市における定時制高校がすべて同様の困難を抱えているわけではなかった。これまでの考察では，大都市および大都市圏においては学校の選択肢が複数存在することで，学校が意図的にではないにせよ役割分担をすることができ，生徒層の混在を避けることができると考えてきた。本稿の一つ目の課題は，この混在の規定要因を明らかにすることである。

また本稿では，こうした事態に対して教員・学校はどのように対応しようとしているのか，その方針の一端を明らかにすることを課題とする。その方針とは，生徒指導における学校アイデンティティと言うべきものである。たとえば「進学校」は学校アイデンティティの最も有名なあり方の一つである。その対極に「進路多様校」「教育困難校」「底辺校」「課題集中校」，また体育や芸術等に特化した特色を打ち出すようなあり方もある。本稿ではこういったアイデンティティのあり方に加え，辻大介が若者のアイデンティティとして仮説的に提起していた多元的自我[iii]を参考にし，単一のあり方にこだわらない学校アイデンティティのあり方が混在する生徒層を持つ定時制高校に有効ではなかという仮説を検討することとする。

本稿に用いた調査は以下の通り行われた。調査票はこれまで筆者らが行ってきた全国調査をもとに作成したが，今回の対象者は全国のすべての定時制・通信制高校ではなく，あくまで下記大会に参加した教員（多くは教頭）を対象とした点には注意が必要である。ゆえにこれが全国の定時制高校の実態を示したものと考えることはできないが，上記の課題の傾向を明らかにすることは可能と考える。また回収数の少なさは，因子分析を不安定にさせるが，これまでの調査結果と比べて大きな変動がないことから，一定の有効性を持つと考える。

調査期間：2010年7月29・30日

調査対象：第61回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会　教育研究協議会鳥取大会

参加者 217 名（回収数 130 名）

調査場所：大会会場

調査方法：大会参加者に受付で配布し，会場の出口で回収。

2．定時制高校の生徒の様子

1）教員から見た定時制高校生の様子と類型

図 1 は，生徒の様子に関する教員の評価である。「幼稚さの残っている」「学習意欲が低い」「何事にも自信がない」という項目に当てはまるとする回答が多く，8 割程度の学校で「当てはまる」「やや当てはまる」となっている。「授業をサボる」「自傷行為がある」「授業中，私語をする」といった項目は意見が分かれがちであることが分かる。

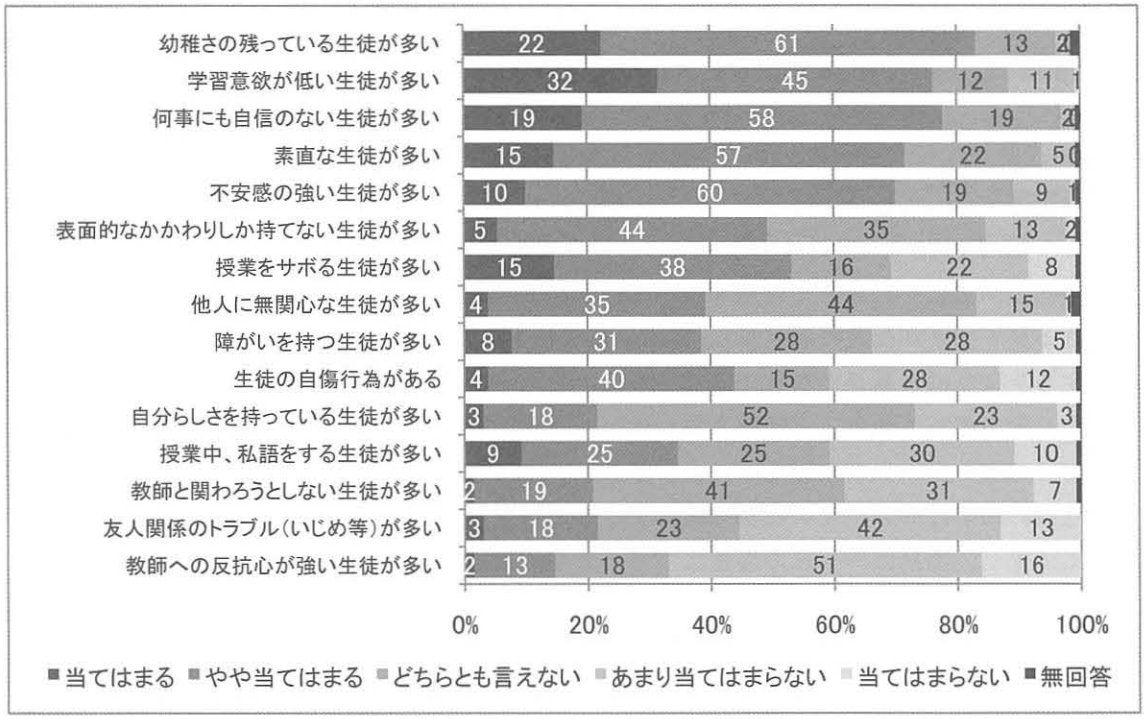

図 1．教員から見た定時制高校生の様子

表 1．教員から見た定時制高校生の様子（因子分析）

		反社会因子	非社会因子	脱社会因子
授業をサボる生徒が多い		.807	−.050	.034
授業中，私語をする生徒が多い		.803	−.149	.008
学習意欲が低い生徒が多い。		.662	.138	.001
教師への反抗心が強い生徒が多い		.654	.202	.014
教師と関わろうとしない生徒が多い		.072	.719	.005
表面的なかかわりしか持てない生徒が多い		−.150	.681	.146
他人に無関心な生徒が多い		.012	.490	−.057
素直な生徒が多い		−.127	−.440	.095
不安感の強い生徒が多い		.001	−.035	.966
障がいを持つ生徒が多い		.136	−.078	.447
生徒の自傷行為がある		−.082	.169	.332
	因子抽出法: 主因子法	回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法		
因子相関行列	反社会因子	1.000	.448	.096
	非社会因子	.448	1.000	.059
	脱社会因子	.096	.059	1.000

これらの項目で因子分析を行った結果が表１である。第１因子には反学校的文化を指摘する項目が多く，第２因子には非社会的な傾向を示す項目が多い。また第３因子には社会との関係性に困難を抱える状況を示す項目があるため，それぞれ「反社会因子」「非社会因子」「脱社会因子」と命名した。なお，「反社会因子」と「非社会因子」の相関は高い。

これらの因子得点を用いて，クラスタ分析を行った結果（３クラスタ）が図２である。「反社会因子」と「非社会因子」がともに高いクラスタを「混在型」，逆に「脱社会因子」のみが高いクラスタを「脱社会型」，いずれも低いクラスタを「順社会型」とした。

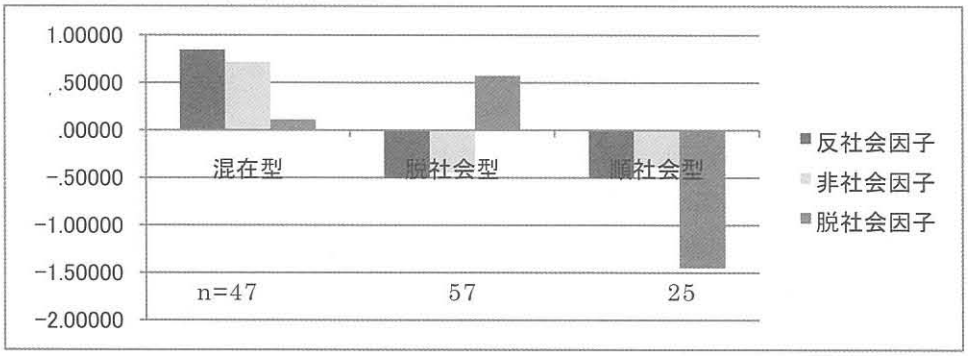

図２．教員から見た定時制高校生の様子（クラスタ分析）

２）定時制高校生類型の規定要因

先に得られたクラスタを部構成・都市の規模・通学範囲内にある教育困難校の数ごとに割合を示したのが図３～５である。

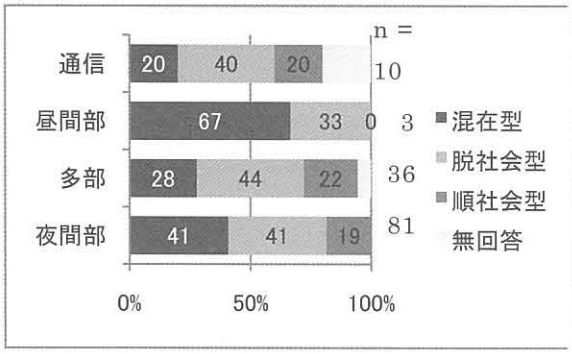

図３．部構成と生徒の様子クラスタ

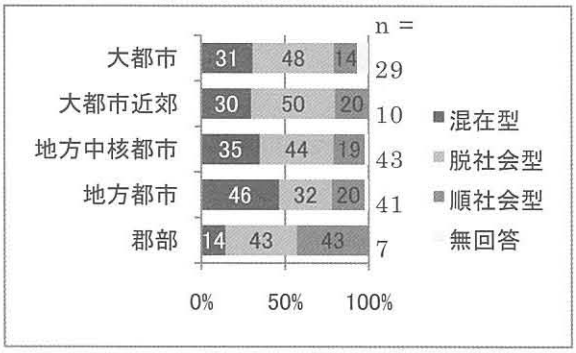

図４．都市の規模と生徒の様子クラスタ

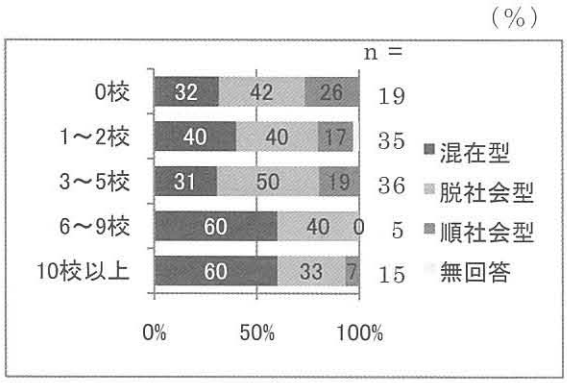

図５．教育困難校の数と生徒の様子クラスタ

筆者らは，高校選択の幅が少ない場合，高校は多様化する生徒に対して分化することができず，混在した状態にならざるを得ないという仮説を持っていた。本調査ではこれまでの部構成・人口規模の他に教育困難校の数などの条件を加えて関連を明らかにしようとしたが特定の傾向性を明らかにすることはできなかった。混在状況を規定する諸条件の検討は今後の課題となった。

3．教員の戦略

1）教員の困難状況

多様に周辺化された生徒の混在状況は，教員にとっては多様な対応を求められることとなることが想定される。それは必ずしも否定的な状況とは言えず，むしろ多様性を活かした試みが可能ではある。こういった教育方法はまた別に論じられるべきであるが，ここでは混在状況が教員のしんどさに関わっているという仮説を検討していく。

図６は自校の教員の様子について尋ねた設問のそれぞれの割合を示したものであり，表２はその因子分析の結果である。その結果「疲れている」「心のゆとりがない」という「疲労因子」と，「仕事に意味を感じていない」「仕事に心から喜びを感じている」（マイナス項目）「うまく人間関係を保てない」という「喪失因子」が得られた。

ここで得られた因子得点を用い，生徒の様子によって分類したクラスタによって分散分析を行った結果が表３である。混在型の高校は疲労因子得点が脱社会型・順社会型の類型よりも有意に高く，喪失因子得点も脱類型よりも有意に高いことが明らかとなった。

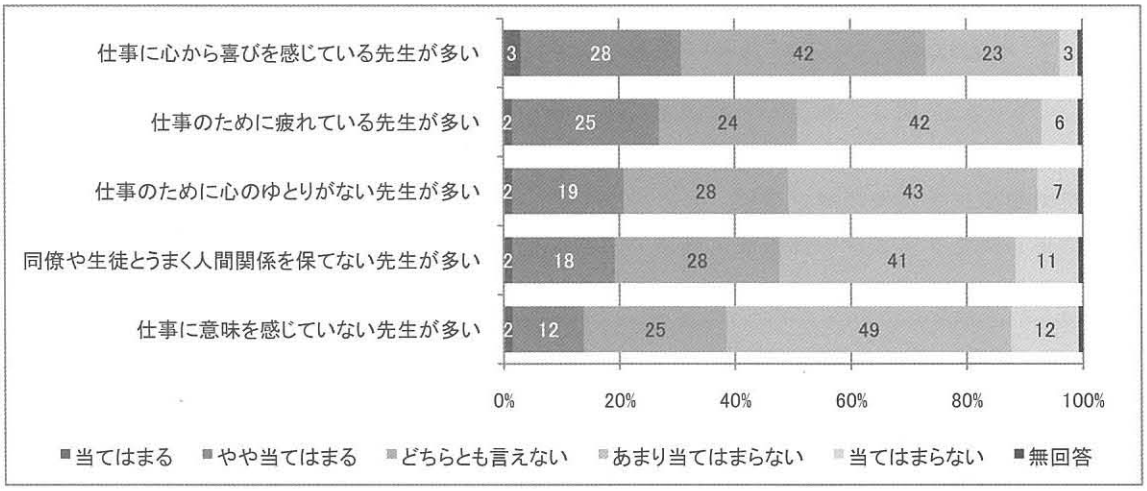

図６．教員の困難状況

表２．教員の困難状況（因子分析）

	疲労因子	喪失因子
仕事のために疲れている先生が多い	.837	-.103
仕事のために心のゆとりがない先生が多い	.919	.083
仕事に意味を感じていない先生が多い	.065	.781
仕事に心から喜びを感じている先生が多い	.220	-.700
同僚や生徒とうまく人間関係を保てない先生が多い	.162	.600
因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法		
因子相関行列　疲労因子	1.000	.244
喪失因子	.244	1.000

表３．生徒の様子クラスタによる教員の困難状況（分散分析）

	疲労因子得点				喪失因子得点			
	度数	平均	標準偏差	F値	度数	平均	標準偏差	F値
混在	47	0.360	1.022	6.39**	47	0.374	0.792	10.42***
脱	54	-0.202	0.868		54	-0.371	0.831	
順	25	-0.318	0.811		25	0.035	0.847	

多重比較はBonferroni法を用い、有意差(p<0.05)があるペアは括弧で示した。
*:p<0.05　**:p<0.01　***:p<0.001

２）学校アイデンティティ

図７は，学校のアイデンティティに関わる項目の回答割合を示したものであり，表４はそれらの因子分析の結果である。「自校らしさ」というものがあり，「自校の誇り」を持ち，「生徒指導方針」が一環しているとする因子を「近代的アイデンティティ因子」，「生徒像がはっきりとしていない」ことと「生徒によって弾力的に運用」しているとする因子を「現代的アイデンティティ因子」と命名した。

前項と同様，この因子得点を生徒の様子によるクラスタで分散分析を行い（表５），混在型で近代的アイデンティティ因子得点が，順社会型で現代的アイデンティティ因子得点が他のクラスタに比べて有意に低いことが明らかとなった。

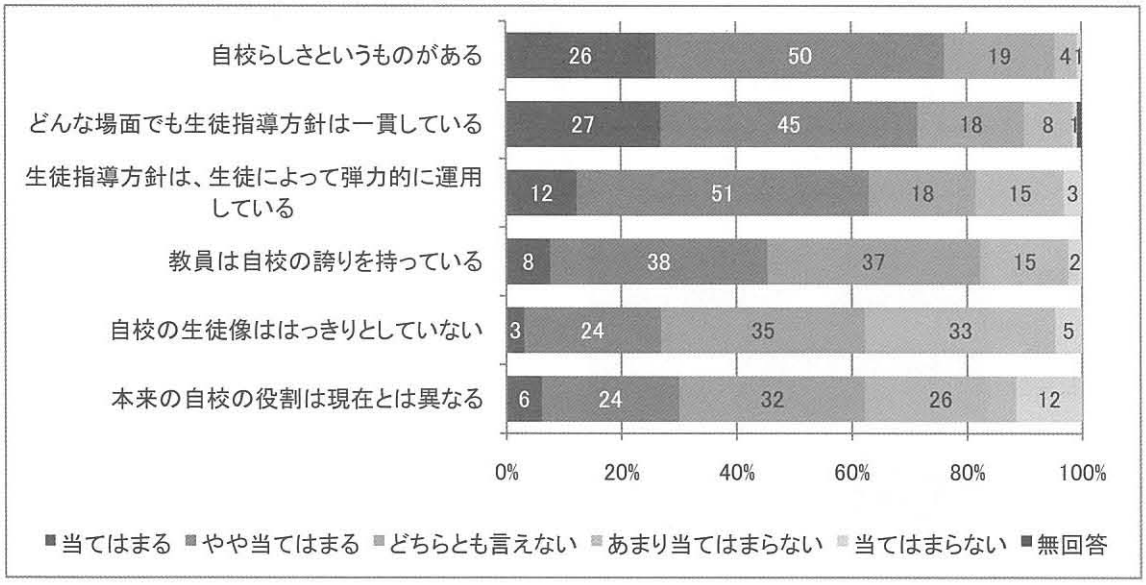

図７．学校アイデンティティ

表４．学校アイデンティティ（因子分析）

	近代的ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ因子	現代的ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ因子
自校らしさというものがある	.724	.011
教員は自校の誇りを持っている	.666	.061
どんな場面でも生徒指導方針は一貫している	.431	−.229
生徒指導方針は，生徒によって弾力的に運用している	.088	.837
自校の生徒像ははっきりとしていない	−.215	.353
	因子抽出法：主因子法	回転法：Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法
因子相関行列　近代的アイデンティティ因子	1.000	−.262
因子相関行列　現代的アイデンティティ因子	−.262	1.000

表５．生徒の様子クラスタと学校アイデンティティ（分散分析）

	近代的アイデンティティ因子得点				現代的アイデンティティ因子得点			
	度数	平均	標準偏差	F値	度数	平均	標準偏差	F値
混在	47	−0.454	0.850	14.37***	47	0.149	0.650	5.61**
脱	53	0.335	0.710		53	0.105	0.802	
順	25	0.175	0.653		25	−0.444	1.004	

多重比較はBonferroni法を用い、有意差(p<0.05)があるペアは括弧で示した。
*:p<0.05　**:p<0.01　***:p<0.001

ここで注意が必要なのは，近代的アイデンティティと現代的アイデンティティは必ずしも矛盾しないということである。たとえば生徒によって弾力的に運用しているという意味で生徒指導方針が一貫しているという考え方はその一例である。図８は先の２つの因子得点を用いたクラスタ分析（３クラスタ）の結果であるが，両因子得点の高いクラスタを得ることができた。

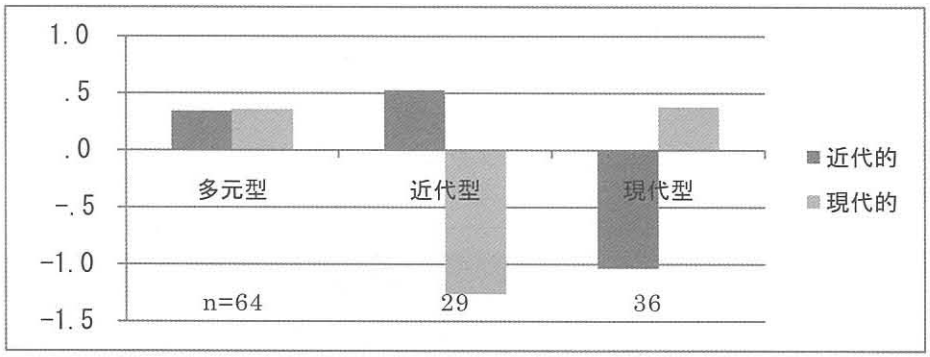

図８．学校アイデンティティ（クラスタ分析）

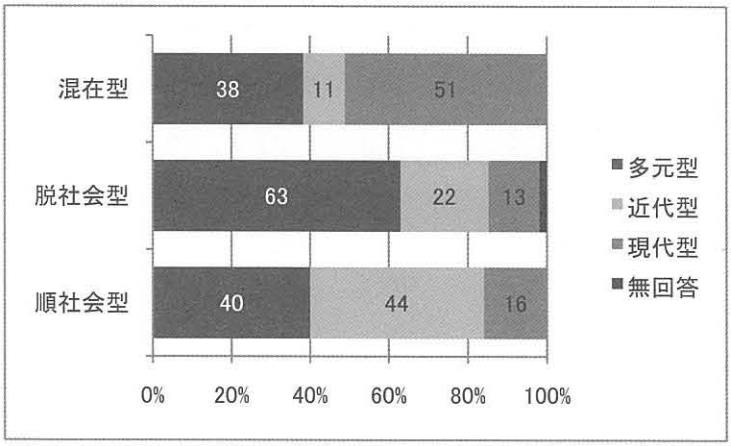

図９．生徒の様子クラスタ別学校アイデンティティ

こうして得られた学校アイデンティティを生徒の様子クラスタ別に割合を示したのが図９である。混在型の学校では現代型が，脱社会型では多元型が，順社会型では近代型の割合がそれぞれ有意に（残差分析，1%）高くなっている。

表６．学校アイデンティティ別疲労・喪失因子得点

	疲労因子得点				喪失因子得点			
	度数	平均	標準偏差	F値	度数	平均	標準偏差	F値
多元型	64	−0.079	0.828	2.55	64	−0.147	0.1.4	8.38***
近代型	28	−0.179	1.108		28	−0.236	0.209	
現代型	36	0.300	0.998		36	0.487	0.166	

多重比較はBonferroni法を用い、有意差（p<0.05）があるペアは括弧で示した。

*:p<0.05　**:p<0.01　***:p<0.001

ここで問題としたいのが，この学校アイデンティティのあり方によって，教員の困難さが軽減（あるいは増大）されるのかどうかということである。具体的には，生徒が混在型であることが教員の疲労・喪失因子得点を高めていたのであるが，それが学校アイデンティティのあり方によって軽減されるのではないかという仮説である。学校アイデンティティによる教員の疲労・喪失因子得点の差を検討したのが表６であり，現代型であることが喪失因子得点を高めることが分かる。しかしながらこれは現代型に混在型の学校が多いためであるとも考えられる。実際に混在型の学校において多元型と現代型の喪失因子得点を比べたところ，有意な関係性は見られなかった。

4．おわりに

本論では，これまでの研究同様，定時制高校における生徒の混在化が教員の困難を高めていることを示すことができた。この生徒の混在化は，周辺化の多様化によるものであり，定時制高校がその役割（生徒像）を分化できない場合に進むと考えてきたが，その条件については明らかにすることができなかった。定時制高校入学生の状況は，当該地域や高校の固有の条件に左右され，規定要因を明らかにすることが困難であることを示し得たのみである。また，生徒像に対応した学校アイデンティティのあり方を示すことはできたが，目的としていた混在型の学校の困難を軽減するかどうかについては確認することができなかった。

ただ混在型の学校が，近代的なアイデンティティのあり様では立ち行かず，現代型かあるいは多元型であるということは，生徒像の変容に対する何らかの対応であることが予測される。今後，この対応の意味と機能について検討が必要となる。

大谷直史，柿内真紀（鳥取大学教育センター）

---

[i] 筆者らは定時制高校教員らとともに研究会を組織し，科学研究費補助金を得て研究を進めていた。（平成19～21年度「地域社会の変容下における定時制高等学校の危機と対応過程」代表者：高口明久→柿内真紀）。本調査は同研究会による補足調査の位置づけで行われた。

[ii] 柿内真紀・大谷直史・太田美幸「現代における定時制高校の役割」『鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要』第6号，2009年。大谷直史・柿内真紀・太田美幸「現代における定時制高校の役割(I)」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』第61号，2009年。

[iii] 辻大介「若者のコミュニケーション変容と新しいメディア」『子ども・青少年とコミュニケーション』橋本良明・船津衛編，北樹出版，1999年。